

## 精神科高齢入院患者におけるサルコペニアの実態調査

永長健一<sup>1)</sup>、高城文子<sup>2)</sup>、高木楓由<sup>1)</sup>、川村美月<sup>1)</sup>  
岡野宥太<sup>1)</sup>、長塚敦美<sup>1)</sup>、塚本和美<sup>2)</sup>、宮本和宜<sup>3)</sup>  
医療法人盡誠会宮本病院 機能訓練室<sup>1)</sup>、栄養課<sup>2)</sup>、内科<sup>3)</sup>

### 【目的】

サルコペニアは、筋肉量や筋力が一定以上に減少する病態であり、転倒や日常生活動作に支障をきたす原因となる。サルコペニアの予防に対しては、運動と栄養による介入が欠かせない。精神科においても NST 加算が算定できるようになり、予防に対する重要性は高まっているが、精神科入院患者のサルコペニアに関する報告は少ない。本研究の目的は、精神科病棟入院患者の栄養状態とサルコペニアの発生状況を調査し、当院の NST 活動に活用することである。

### 【方法】

対象者は研究への同意が得られた 65 歳以上の精神科病床入院患者 112 名（男性 49 名、女性 63 名）とした。測定項目は年齢、身長、体重、BMI、血中アルブミン濃度、下腿周囲長、握力とした。サルコペニアの栄養状態の評価は MNA-SF を用いた。判定は、国立長寿医療研究センター・老化に関する長期縦断疫学研究（NILS-LSA）のサルコペニアの簡易基準を用い、65 歳以上の高齢者で、握力が男性 25kg 未満、女性 20kg 未満である場合で、下腿周囲長が 30cm 未満の場合にサルコペニアとした。統計解析としてサルコペニアの有無を 2 群に分け、カテゴリー変数は  $\chi^2$  検定、連続変数は t 検定で群間差を比較した。なお、有意水準は 5% 未満とした。

### 【結果】

112 名の内 68 名（60.7%）がサルコペニアを有していた。サルコペニア群は有意に年齢が高く、身長、体重、BMI、血中アルブミン濃度、下腿周囲長、握力が有意に低く、MNA-SF は低得点で、63 名（92.6%）が低栄養であった。非サルコペニア群でも 30 名（68.2%）が低栄養であった。MNA-SF の項目別では自力で歩けるか、神経・精神的問題の有無の 2 項目が有意に低得点であった。

### 【結論】

当院のサルコペニア有病率は 60.7% と半数以上で、施設入所高齢者のサルコペニア有病率 14～33% と比較しても高いことが明らかとなった。また、サルコペニアを有する患者は 92.6%、有さなくとも 68.2% とサルコペニアの有無にかかわらず高い割合で低栄養を呈しており、NST の介入は有効であると考えられる。